図書館だより

8月

2021年

✿ もうすぐ２学期が始まります。✿

まだまだ、暑い日が続いていますが、天高生のみなさん、お元気ですか？天高図書館も館内の特別清掃、蔵書点検が終わり、皆さんの来館を今か、今かとお待ちしています。新着図書も夏休み中にどんどん届いています。今回は、特におすすめしたい5冊を紹介します。

今年度、初めての試みですが、ポプラ社主催の全国学校図書館POPコンテスト（締切　11月30日）に参加することにしました。
図書委員の皆さんには、7月9日の委員会の時にお願いしました。図書委員でなくても、参加できます。参加してもいいかなと思う人は、新学期になりましたら、図書館カウンターでたずねてください。
詳しくは　こちらのHPをみてください。

https://www.poplar.co.jp/schoolLibrary/pop-contest/

『ぼくのお父さん』
矢部　太郎（著）　新潮社

「大家さんと僕」シリーズで多くの読者に感動を与えた矢部さんが、今度はお父さんを描きました。矢部さんのお父さんは絵本や紙芝居を書くことを仕事にしているので、なんでも絵にして残しておきたい人です。できたてのご飯も、「このご飯おいしいそう！書くまで食べるのまって！」といわれ、結局、すっかり冷めてしまう。こんな、毎日結構大変ですが、矢部家はみんな、いつも楽しく笑顔で過ごしています。矢部君が同級生だったら、毎日こんな話が聞けてたのしいなぁと思います。でも自分のお父さんなら、ちょっとえんりょしたいかも、、、、(#^^#)

8月の新着図書です！！

新着ではありませんが、
おすすめいたします
(#^^#)

『ブラックウェルに憧れて』
南　杏子（著）　光文社

この本のタイトル「ブラックウェル」は、エリザベス・ブラックウェルという世界で初めて女性で医師になった人からとられています。彼女が医師になるまでには、差別と偏見との戦いでした。その戦いは現代でも続いていて、卒業して医師になった後も、女性達の葛藤は続いています。医師としての迷いや、苦悩を抱えながら前向きに生きてゆく４人の女性の物語です。南さんの作品はドラマ化（『ディア・ペイシェント』）、映画化（『いのちの停車場』）もされていて、どの本もおすすめです。

『クスノキの番人』
東野　圭吾（著）　実業之日本社

東野圭吾さんのミステリーでない作品。『ナミヤ雑貨店』のような不思議系の話です。 解雇された職場に盗みに入り逮捕された主人公、直井玲斗は、弁護士費用を支払ってくれた伯母から、クスノキの番人をするように命じられる。そのクスノキに祈れば、願いが叶うと言われていた。その番人を任された玲斗と、クスノキのもとへ祈念に訪れる人々の織りなす物語です。「人殺しの話ばかり書いていると、時折ふと、人を生かす話を書きたくなるのです。」（東野圭吾）だそうです。一気読み間違いなしです。

『臨床の砦』
夏川　草介（著）　小学館

HPに掲載されている編集者さんのコメントから。

〈 編集者からのおすすめ情報 〉

現役医師としてコロナ禍の最前線に立つ著者が自らの経験をもとにして克明に綴ったドキュメント小説。2009 年に第十回小学館文庫小説賞を「神様のカルテ」で受賞し、シリーズを書き継いでいる夏川草介氏は、現役の内科医でもあります。コロナ禍の最前線で多くの患者さんと向き合う日々が、一年以上続いています。本書は、著者が 2020 年末から 21 年 2 月にかけて経験したことを克明に綴った、現代版『ペスト』ともいえる記録小説です。

『線は僕を描く』
砥上　裕將（著）　実業之日本社

これも新着ではないですが、おもしろいから、読んでみてください。

両親を交通事故で失い、喪失感の中にあった大学生の青山霜介は、アルバイト先の展覧会場で水墨画の巨匠・篠田湖山と出会う。なぜか湖山に気にいられ、その場で内弟子にされてしまう霜介。水墨画とは筆先から生み出される「線」の芸術。描くのは「命」。はじめての水墨画に戸惑いながらも魅了されていく霜介は、線を描くことで回復していく。（HPあらすじより）

作者が水墨画家なので、水墨画への愛が伝わってきます。大きな事件があるわけではないのに、一気読みしてしまう作品でした。